

令和5年4月15日

むすびらき読書会

北村透谷『内部生命論』（『北村透谷選集』勝本清一郎校訂、岩波文庫、1970）

●「造化」＝「ネーチュア」の思想

「人間は到底枯燥したるものにあらず。宇宙は到底無味の者にあらず。一輪の花も詳に之を察すれば、万古の思あるべし。造化は常久不変なれども、之に対する人間の心は千々に異なるなり。」

「造化も亦た宇宙の精神の一発表なり、神の形の象顕なり、その中に至大至粹の美を籠むることあるは疑ふべからざる事実なり、之に対して人間の心が自からに畏敬の念を発し、自からに精神的の経験を生ずるは、豈不当なることならんや」

●人間の「生命」

「吾人は人間に生命ある事を信ずる者なり。今日の思想界は仏教思想と耶教思想との間に於ける競争なりと云ふより、寧ろ生命思想と不生命思想との戦争なりと云ふを可とす。」

## ●「文芸上に於ける生命の動機」

文芸は「思想と美術とを抱合したる者」であり、「宗教若くは哲学の如く正面より生命を説くを要せざるなり、又た能はざるなり」

## ●徳川時代の思想と文学への評価

「儒教道徳は實際的道徳にして、未だ以て全く人間の生命を教へ尽したるものとは言ふべからず。」

→徳川時代の美文学は「卑下なる人情の写実家なり。人間の生命なるものは彼等に於ては、諧謔を逞ふすべき目的物たるに過ぎざりしなり」

「謂ふ所の勸善懲悪なるものも、斯る者が善なり、斯るものが悪なりと定めて、之に対する勸懲を加へんとしたる者にして、未だ以て真正の勸懲なりと云ふべからず。真正の勸懲は心の経験の上に立たざるべからず、即ち内部の生命の上に立たざるべからず、故に内部の生命を認めざる勸懲主義は、到底真正の勸懲なりと云ふべからざるなり。」→透谷は明治文学の変革を期する

## ●文芸に於ける写実派と理想派

詩人哲学者は「ヒューマニチー（人性、人情）」の観察者だが、それは「人間の内部の生命」を「解釈する（ソルヴ）」。そして、「而して人間の内部の生

命なるものは、吾人之れを如何に考ふるとも、人間の自造的のものならざることを信ぜずんばあらざるなり、人間のヒューマニティー即ち人性人情なるものが、他の動物の固有性と異なる所以の源は、即ち爰に存するものなるを信ぜずんばあらざるなり。」

「文芸上にて之を論ずれば、所謂写実派なるものは、客観的に内部の生命を観察すべきものなり。」

「文芸上にて理想派と謂ふところのものは、人間の内部の生命を観察するの途に於て、極致を事実の上に具躰の形となすものなり。絶対的にアイデアなるものを研究するは形而上学の唯心論なれども、そのアイデアは事実の上に加ふるものは文芸上の理想派なり。」

#### ● 「瞬間の冥契」

「瞬間の冥契とは何ぞ、インスピレーション是なり、この瞬間の冥契ある者をインスパイアドされたる詩人とは云ふなり、而して吾人は、真正なる理想家なる者はこのインスパイアドされたる詩人の外には、之なきを信ぜんとする者なり。」

「インスピレーションとは何ぞ、必らずしも宗教上の意味にて之を言ふにあらざるなり、一の宗教(組織として)あらざるもインスピレーションは之あるなり。」

一の哲学なきもインスピレーションは之あるなり、畢竟するにインスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに対する一種の感応に過ぎざるなり。吾人の之を感ずるは、電気の感応を感ずるが如きなり、斯の感応あらずして、曷んぞ純聖なる理想家あらんや。」

「この感応は人間の内部の生命を再造する者なり、この感応は人間の内部の経験と内部の自覚とを再造する者なり。この感応によりて瞬時の間、人間の眼光はセンシユアル・ウオルドを離るゝなり、吾人が肉を離れ、実を忘れ、と言ひたるもの之に外ならざるなり、然れども夜遊病患者の如く「我」を忘れて立出るものにはあらざるなり、何処までも生命の眼を以て、超自然のものを観るなり。再造せられたる生命の眼を以て。」

「再造せられたる生命の眼を以て観る時に、造化万物何れか極致なきものあらんや。然れども其極致は絶対的のアイデアにあらざるなり、何物にか具躰的の形を顕はしたるもの即ち其極致なり、万有的眼光には万有の中に其極致を見るなり、心理的眼光には人心の上に其極致を見るなり。」

→観念ではなく具体こそが超自然的な「生命」の極致である。